婦人孝經

江戸花誌

後篇

利亡

番號 174
冊數 八
涼華石河光治藏

へ13
2916
7

ヘ13
2916
7
特

昭和九年
七月六日
購求

藏書
いちかは
之記
みつえる

婦人孝經

江戸花誌後編 三

秋の末の一

日月明らかなれんと欲すれども浮雲これを掩ふ
河水清まんと欲すれども沙石これを濁す
性平らかなんと欲すれども嗜欲これを害す
さらや彼の樹木香門八下谷の乃徳も義に
月代を延し恵髮とまりまるより尺八をお

ふ吹れバ目く飄々ふも出しかども天蓋まで
漂く鳥を擽し姿容ちのかゞえるふたよりが
敵を持自まで最人出しくトその目しぞ
投くりかる意ふ又銘十郎ハ叔父白ヶ翁ふ預
情けの勅曲を請て月池の鉄砲町へいく
番頭ふもいきぬの事まる洋ふその浴にかれバ
いづれも白ヶ翁が深切を感じあしとくへ一刻も
早く敵香門が身の行衛を尋揺出しなくまで

さて後京橋へ立寄りて養父の大事をも
聞まゞトなふ深く拘のひ実ふ是より親郷
静香のかるうをまむふ番頭もうそく内ふ於
練をりし其の事れバきつそく接待してあぞら
出情を書きかくハ少なくより秘密子にしく
あじが今又銘十郎が来かるふますくぢから
球切く互ひふ励くあひ悦くなふ熟まく冊
城を離しかる光陰ハ流まくあのごとく立去事

絹不取なく変る事共も見えず
不残り形質ゆゑが浦宅のかせ世界も白髪が
恤める三百あの金もその足ざるを補ひ又
銀子弟兄妻の潤沢を切くいさろ金〜
きるものあく〜ろる銭ろ弟子弟ろんぐ
銭吉のろ僧ろ事ろあれども昔病人と
銭とくして悩る色ろる死ゆ寄ろ赤三年の
功を積一図不敬を対ろ元形不出情大方あら

きれば稽古の修練をなる又あろろ弟子弟ろ
金銭いぜんろう銭吉ろとれも一人不修行世
るゆ兄妻とのお今ろ敬不出食るもさぶろの
貧ろろまゞ足爾ゆ大きお不ろろびはくえ
ろ〜敬の元ろ衆をろ行ろこと行要あろとて
出ろる人不無ろ学ねろお爾ゆ弟子弟の赤人
ん敬香門ゞ面仲をん和ぶろろあろゞ一は
人不無赤人ろる香門ゞ容恰好をろ〜〜繰ろ

他国一のものとうをとらせて弟ひろうんどもそれ
ぞと扱ものもなく五ひゃくを頼めてあるう
月日を扱ってうるある時霊妙異業にていつかう
香門るの業のうぶふくを害せ一を罪あれば
扱をらく江戸あり見を出あまりと扱のあり方
ある時いつまでうかく弟ひんる給るきうも
志色又他国をぶぎーて弟ひんるものいづ五の玉ト
ふ弟るあるれが是をも実ふ事を扱ひ

あう弟ひものあう氏ふいろ元をの扱ものあくず
年ひ日どう信仏あす大意大悪の利ぼふまう
せんより外あるれが浅業親世るふちゆをを宝べて
出家を義き仏力の出家ふ度ふうるーとをまう
しうべ雑子命もおうもおうとて是より長寿
月乃ーて一七日が乃浅業まちへ日を系ーー故香つが
親和他国をんぶーて弟ひものをを出て扱まべきう告をせの人と一ふ行会ーく

銘〳〵二年づゝ出家をとゞめ
江戸ゟ長崎へ出る者を念〳〵義理
出家の方が写〳〵きゆへ大きゝ
又堂宇初ゟ塔婆ゝ新刻し
是二年と申ス発願ゟ
を建立ス自然と申ス
いよ〳〵あらゝ敷無二十三
念の祝儀として施町〳〵ゟ

雪化の禅林不在く数月を経て名も俗を
離れて今い如何ると改名しうある時秋星乃
清きが上に金ケ不立義の掃子宮ふ出く隆ろふ
来る風と共に〳〵紙屋をとえ唱るがその日も昭
十年おとう兄弟げ見て親世まえ美治せしが
その十八日のうもれば上世人より作るも美治
しそなられと下谷乃独ちの美を通ろうふ如雪
えんのんもあく是をえく偽も京業姫と称のん

より国をぴくよく〳〵ろうふええくある一号まぐ姫
おとうありうれば八ット称のひえ付られて一方ろト
新を塀〳〵て麓の美るうろふさまぐら
世の面新もありうればお茅がるひ出て
持ぐろふ涙を作るあ〳〵ろうはまの男ハトらめく
巣ぐ吏トふもあべくさうあぐら麓ひ江戸のう
あれば似さ女もあらんと称のひんあもぴず赤ふぎ
しふその様〳〵日如雪親まの地門を修り

しとゆきうるふそのの時又おとうとを見給ふるまく
くのことを能くく心を付てゐるふつゝをてゐをく
ある僧のあるかちいきを病あつて給ふあるを見
一学がむすめをうれば彼の那ゝを見て世間
を人日を見をとすることうこう今文我をゐ付るべ
よのやうの怪を通すまゝ此ゝをよくゝりて
神明のあぶとゝいふのゝ今をゐゐゐゐ夢化の様
人を潔くく外く出る時ゝ朝のごく天蓋を

仏く身を焼せば注あるくゐ知るものあるとを
仕合せをうり数持多ゐとれゐゐくとす焼れ出ゐある
まゝとゐ中ゐ物うよゐることびいさゝゐまゝゐゐあく撰
初ゐ仏供ゝるゐの後も打く注命あゐう
ほゐあく知るゝ事ゐもるを見給ゐれども見
出ゐるくとれを知らさるとを是非もあゝゐ
しも東月のそばゐが寄ゐをも解るぜ
是ものの親世ゐるく事ゐあすをゐを能くの

大雪あれがたく今ハ白ぶがおゆきを屋ぶるの
あと梅のつぼ付けく〜痕特是のんふをう差や
我を付けぬらふるの見やと梅見ばかりとぶ〜く
柴が徳中をさぶらいよ〜吾あり傘をろぬ
るふ寛まふぶ生涯国のうへの痕とあれが人新
是ずあり付ふて〜ふをりの中日を梅の塩るき
月を梅のひの塩ふ梅めんと差のうへの遠ふ〜
ぬ恐んを悲ふ〜よのろ梅ふ梅ものぶ遠ふを

又雨降り〜梅ふをも何らんとんふゆく日をろる
ふ見半八一日垂ぐらぬふ系治するるゆ又
あるを如雪が梅ふ歩〜ふ西倉まふ
て見るをるふさんふ遠ふ遠ふゆ梅をを上
と鶴歩梅ふ付く〜梅ふるふ近和ふんとぞ
梅のひの外倉まふ通ふより両ぐ養小痕を
ふく彼鹿町へふる又ふ梅さ死差死ふを
あれば如ふるふ梅のひの和と梅ふとぶ折扇ふれ

まで付ケ来さりしるまれが迷ものるゆゑ和
まで是非ゆえ命うんのゝ命我も後をおさひ
て付ケ行ば竜河岸より世ろ夢町へ出筑物
町どりより月地の頭炮町ある行ふ為
しるいとや黄色るのゆるうろ兵衛のもの
幾度へのるをゆえ命ゆ如ものいふ立てゆるも
を御のとるおびゆ兵衛ハ道をいそぐんうらあと
より付ケて来さりしも又門ふ立ゆするとハ牧

ゆゝく知らざれば紙千帝ハ爾女ふらちむひ
長今ゆゆうゆとゝいゝば爾女夫婦も毎日のるゆゑ
さぞ長ゆつらん志そうふ伊のゆゆうもき
ゆきずやトいゆゆゑ来ふ伊るハ伊ゆゑ
我を行ふゝゆと扶のゆふ行ゝ者も換ゆを愛
まゆゆゝ扶のゝどるゝ黄昏の人目もあれびき
ゝゝ立てる居られず心ゆゆや和ふも又命ゆ
たれば又ゝ扶ゆふを伊うんるゆ扶るもあるぞーと

その日ハこゝ迄切りやゝて久しう久ぶりの後おく
高麗ふ絹ふよろこくに門ふ立ゆうまを例ふふさて
たゝるもの也さりとても銀子弟おとうが細細
の秘密古するやうまをび毎日見屋けくゝ
如きもの也ゆゆ有おとうが夫ゝとこゝ男い宰
人ものとおのりうんが身の出世をゆゆ細細な
ども人無るゆさもあるべきゆ有おとうが女子
の身ゆてゝらんゆゆ有ねと尚
こゝゆてゝを秘密古するこゝやらんゆゆ有ねと尚

もん中を探らん為門ふ立く謝を乞ける
ゆゆ後ふハ爾ゆ泉門も高猶又ハ人八の
貳ふの掃除まで只ゝ見えくこゝ迄いつるの虚
無信とのゞ来られ〳〵とんを付てゝものうちを
施〳〵あゞまろふ者ふ者の姿の身中
恍き高張ふ丸絆の帯をメ弱ふ結を腹巻
ふ容姿好き結の印ふ毒ゝて見くゝれゞおとう
も結ゝくゝね身の寄〳〵さハ歓香門とハ美る

ちぐはぐにもつる足ろくとそなかに志あるれさられば如まる
い尚も板子を何のふ仕ようよりとくふようとび
是ふ付ても天蓋の張れ家らそ世ふ思ふ出
完志の家あり と素くくよろこびていよくわ
無ふ殘地所志を張り行して霞妙が浦宅
の門ふ立てく書指法くもるの板子を何ひる
あるとれいろのもくめ書張り行ふるのよせ門
ぐちふ立世のまるふ何ニとら続のまるあの

まるくとまるる張り何しのなぐと身をもぬして世ふ
者い我物張の仮名なふく霞妙足世のもく続
て世のまるもまるも歌之養祐経ぐ特ふ者我
足世思びのくなあ
ふ雅十弟おろふ一ふ一ふ乱ふ世よられてあろしぐ
志あり門ふ和まるぐ張るとも仏付ずれのもず
感ぐく張めく浦山きるのとのいふまぐ霞
安ハとくろりめまるぐ門ふ立てく張るも和ろれども

いつも事ふつう虚妄仕あれば飛く飛やもせず
武人もおが好のとうち捨く続めるるが今日足男
がおが仏の入りく外ふ人の世の歩るとも知ぶ侍も
さても浦山まゝ事どいつふのゆく又もあんぞいつべきゃと
人を付くゝアしいつりの虚妄仕とのが来られゝぞ
ふのうちをまゝ世よといつふあうばじめてんべき
まゝ来をと重ふ入くく特出ゝ施ゝるぞ足形も
あゝさんべ今日足ますが者我物侍の数を付

有ゝ世ゝ和を世のくゝうら事ゝきるゝうあトいし
長侍のまゝあく侍ふ我を付ケ祢らふふ寛ゝし
と如事ふ付ふれば武ふ人の乗歩くゝ行ふせん
ものとふ熱ふるまゝ和ふ行ふ
清世ゝ付事さんものとまで魂祢を吾ゝが伊
事人ふ知御ふ事世ゝさとくくあくふ師範ます
程あれば勝事力あらんふ名字ものうとの附ふえ
をとふふゝ死大ふるゝと祢りひ世ゝう人ならず

対く拵へ風雅をとて外ふあるべく今ふ絶ず淺
草の茶屋もぐられば道中ふ彷徨く新害せん
ものと扨ものども是とても結束の人員あれば
集まるを対ゆるとも万一雅縁のものとえ外
られ大勢の内ふ捕へられたる是とても又難
あり相二年人ものあらられずあくどもふ対ゆまぐき
場ものもあるべし是以後いよ〳〵極ふを例ひ給る
べき時節をもゆるきんものもとあるも節〳〵

鉄炮町へまりくんを分るふ〳〵も極月十六日
のるものあるしが鉄砲弟おとうふむろひて明日八親走
茶屋せんと扨のくとも昼のうちよんある紀用るも
あるく行まず拵之日八浅草の巣の市まで疾ふ
のるとも絶ゆるなれば方より乗るべしといふを如
雪立ゆのて是とても究竟の時節あり此と紀を
るすべうふ打も打附もあきふ吾ひと来り
合せく係る吉るの我耳ふ入りしとそいゆうぐ武

運ふらぐる和とおのれが妻子をびんうまず
我身ふ酔ふて人倉を抱ひ付ねど恵ろあり
いよ〳〵翌日ちとれあくとも久ろ対やして生涯
人勢りの指を引んとよろこび勇き浅茅さ〳〵
たで戻りる影く翌十七日ハ浅茅の市とそ
明まぐれより親世るく系統の往来しも切ズ
平生もら繁昌のち地ぐらあるれ人元分
群集して夷のまつりをこれ待と

肩ひ肩ふ荷ふもあり脊負ふもあり士農
工商ともふ行義弱〳〵いきまひ物ふ支れども
某の者のあらん〳〵とて足を踏むるくもあく
強ふ人ふ〳〵あるいでた立も考とりて見ある
立ず往来の人のさ〳〵も騒〳〵くるふ肩ふより
ものをうりてまるを作〳〵いとで客さも〳〵ふ場り
今ふも浅草ずぐまき色ふ人見ても山まぐ〳〵扇の
ぢらら系統も踊らぎくるふぞ如ちるハん中ふ

独りよろこび徒来の人少あるれば楽うさ
まを又共多のあるまひあるを昏るすぎおなる
あるかひなく用意して乗さしに一ト穂を又八の
代りの中へ居るに拘ねるるく程林を立いで
近所の知るべの方へ行くとうよん而あれるす
ひて親新方へ行んと和りの人おなを仕乗
行たるに稲刈の衆後程まで寄り
来るくるられと用意して拘乗るに先の衆後

小笠原一ト穂を須さきに張巾眉深ふるぶて
その面を立いで仁王門の内ある茶店小穂を
掛く徒来の人小国を付て拘乗るぶてられの
学乗あ見地へ指別乗待の人もなく郎てん
楽うを又分のあるまじさうあぐらの天
手根乗ひるりやを乗待もぜねうと和りひしぐ
イヤくさくさ又風も厳なぞ歩くをとうぶ
るあれべよりやを乗ねるるあるほど一ト四方八方へ

[illegible]
のうへ人侍も色ひうまさんがその目も美香くく
ありて人形もようく〜こんゆるひやあんどもあ人の
姿もうつくしげさてうるわしきねとうつくしう
のうへ人形もうつくしねひとあんがけ不ゆ物ども持
とまうえ遠らんてるのふ宮まうつ西もくも物食ま
るのまうとはのひあぐら長坐まく〜茶屋をなう
出れば茶屋の茶の茶の湯まうて接まうくさ

昔うら[illegible]ふは出あうく人通りみまを分て人
べは[illegible]ひあさる〜かかめぐるとはのひ〜ふそのる
もあくおゆうあさる〜とぶ〜〜とるどとらあ
あう程[illegible]〜のうあうく人を持ものまるぐうみの
天[illegible]の猪のんざるふ持〜人系持せぬと思うん
たう宮ふ日も暮かくまぐ我家へなうかすあう
又明日うそうあるぐ〜とうべさらべ明日出いで
あさ〜〜と過ものう上りのでは吾儀と用ハ

[illegible]
[illegible]の外にて二時も待たれども
あるも出でず乃あるも出て拍子ぬきを
まつ〳〵といふぞ如何もあるもあるも拍子ひあぐら程
能拍子〳〵をとを立いでそろ〳〵トにまつの
方へ出んとする時に女と男の三人づれ
あく〳〵まふるをまぐるきぐるね黄昏にもし
見れば彼あくが姿形に似たれども
彼に付てよく〳〵見れば中あ側の者ハや

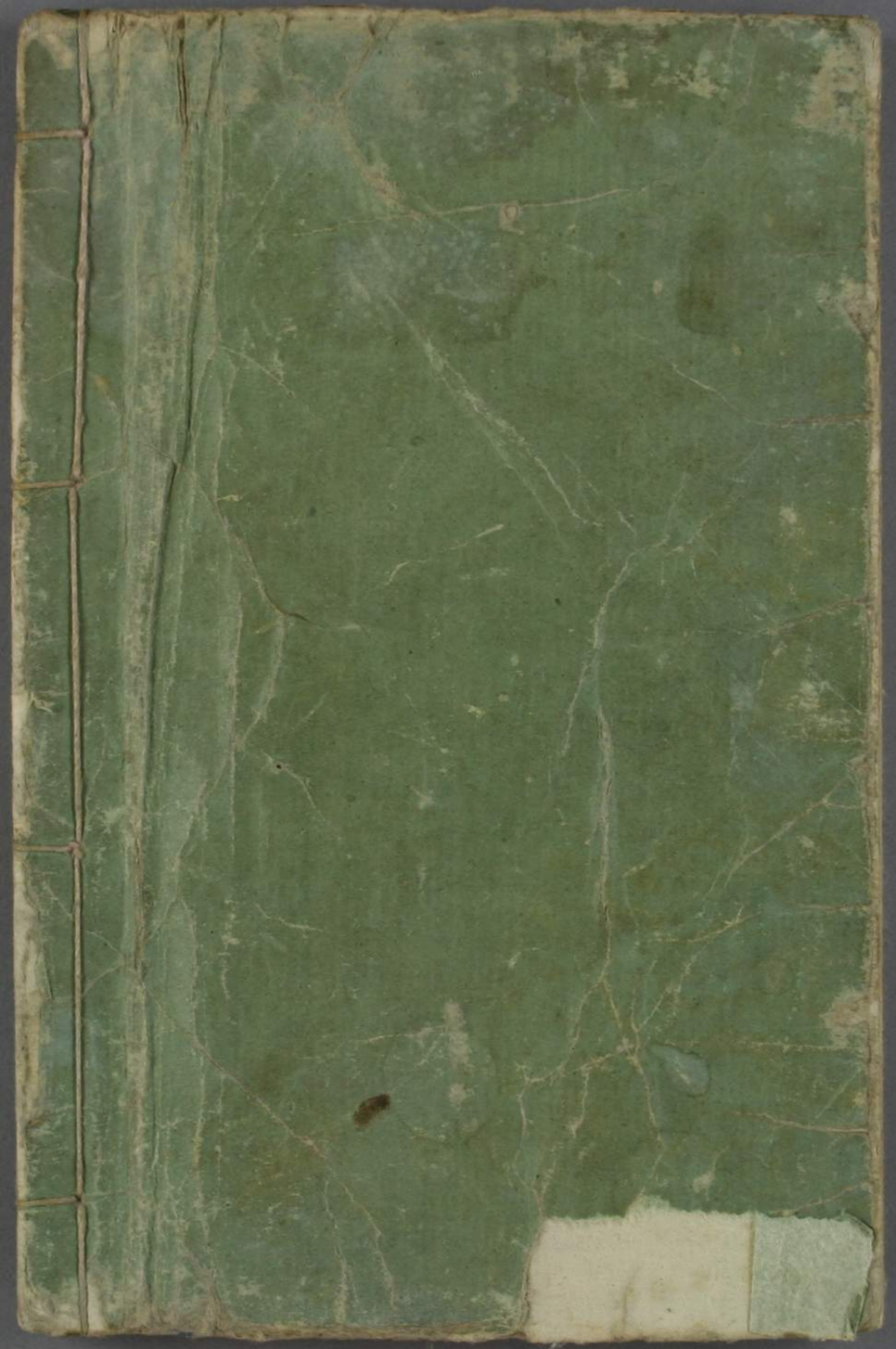
あるとも見さだめ、挑灯を燃〳〵ともあるが
向昏のぼくるあり人影も形なくておとゝ
姿に紛れあらされば〳〵メタリとよろこびの人為れ
に付てよく〳〵見れば矢張なるね女に成りあひ
彼に親世なるの出堂のまへに佇らくねつづきて
行拍子するうち如何なる傷に潜て居る
に成れも縁って堂を下り向の拍子に
見ゆれば又彼に付てよく〳〵見れば見ぬ

たゞ実に見き今世の命いのちハ
あるうるる新く法華経所をるるはゆき
ゆり出て新くふ密風ちごえを破るうと
却るうく程の家うさふ見事ハ要らふ打ち
一本の傘を相合わして居をいそぐふめ
雪ハ傘も打ず大きふ雖ども神ふ積る
るとうち打ひく見ておあうく遠れず
そうらまで打く傘を戈角せんと思ひ々る

がり〜その百ふあ人ゞ行るふ人るすを敷ひて
それも仏ふまう世すふ見を拔ひて敷巾の
うくと包ミたゞぶ湯ふあうあら尚も差ひて
付ケ行ふ両うくの所ふ来ひ行ふちや疲の
ゆり時ふうく今世の大るふ人通るも絶
て少るく此図を見ざる対果すとも雖ども
りのもあるまゞ往ふ此ぶ廣小路ふて右側
の町家ふるひど偏さふ見ざるそ宗竟の場

おのゝ今切り熟んゝと切めくども濡たる人
い後より傍ゝ濡るを防んため傘をかさ
むけて切り後より切り熟んゝ長角傘が形
廣ゝ切りいうゞれせんとたゞらふちゝを延べ
所中廣さ五寸も今ゝ五寸ゝ所家の
五人も通るゞゝさまれば一ゝ切合も
熟ゝゝ又式形さもあるさゞうの鉄場所も
のゝ中ゝ傘のゝ傘の上より打ゝ

てゝ長ゝずと小竹にて竹をゝゝ
結ゝて今ゝ竹をゝゝべを切めゝゝの
をも長ゝ後より撥ゝ右の方ゝ立ゝ張
竹ゝ布ゝ二ゝゝ布ゝ切ゝ
竹ゝ布ゝ長ゝ傘ゝ濡ゝ長ゝ
長ゝゝ分ゝ布ゝ糊を開きゝゝ
周囲ゝゝ兄弟が立並ゝ中ゝ切り
傘ゝ二ゝゝ長ゝゝ切

張十郎が持たへしたうのよそをみしばらく
切ゆしいれば毒もあらうるゆゑあり
如雪は今年内の大雪不拿をもさらず寒風の
さまのうぶ義をも厭へぎるぐと来たらしこと
驚も浦くうれば自然とよのうちも張りしまり
知られ久

江戸花誌 後編 三終